PROJECT

“何か”「まだ、はっきりとはつかめないけれど…」

文・写真
西 洋子

共同研究 ● 民族学博物館における表現創出を活用した異文化理解プログラムの開発
～多元的な場での“気づきの深化”のデザイン化～（2008-2011）

みんぱくの展示から受けとるもの

私たちは、みんぱくの展示から何を受けとるのであろうか。ごく一般的に考えれば、博物館を訪れた人々は、さまざまな文化資源を自分の目で観察し、可能であれば手に取って、展示の傍らにある解説文や専門家の説明を手がかりにしながら、異文化への知的理解を深めていく。こうした理性的なかかわりの一方で、私たちの感性は、それが何であるかを学ぶ以前から、展示そのものが内包する多義的であいまいな情報を、自らの身体で直観的につかみ取り、ときに無意識的に様々なイメージを紡ぎはじめる。このような感性による展示との出会いや、そこから創出するイメージは、通常は獲得した知識ほどには意識化されない。それらは、時間の経過とともに身体の内側に沈み込み、その多くは、やがては忘れ去られてしまうのである。

Museumは“知の館”であり、みんぱくが異なる文化に関する知識を獲得する場であることに疑いの余地はない。一方で、館内に静かに陳列されたモノとの出会いを契機に、特定の文化に深い愛着を持つことや、さらにはモノに込められた異なる文化や社会に生きる人々の思いや願いを想起するような“生きた感覚”で異文化と向き合い、その後も主体的にかかわりを築こうとする心性を耕すためには、展示とのどのような出会いや、その際のどんな支援が重要となるのであろうか。知的に整理され得る明示的な情報を提示することや、対象を自己とは切り離し、理性的な観賞を促すという手法だけで、はたして十分と言えるのであろうか。

本プロジェクトの目的

「民族学博物館における表現創出を活用した異文化理解プログラムの開発」と題した本研究では、民族学博物館における学びの新しいデザインを構想する第一歩として、博物館を訪れる人々と、非言語的で直観的なイメージを湛える文化資源との感性的な出会いに焦点をあて、自己の内側に生成したイメージと展示から得た知識とが相まって、異文化とのかかわりに新しい回路をつくりだす可能性を検討している。本プロジェクトは、展示との感性的な出会いを通じて、人々の内側に生成した多様なイメージを浮かび上がらせるために、博物館にワークショップ形式での身体表現の場を設定し、身体を基軸とする“受けとること”と“外に表すこと”の循環から、更なる気づきが引き起こされていくような、表現循環を組み込んだ学びのデザイン化と、その際の支援のあり方の検討を目的とするものである。

このページの写真3点：特別展示場での表現ワークショップの様子。

いうまでもなく表現は、人の内に在るものを言葉や音、色や形、身振りなどによって外在化させる行為である。そのなかでも身体表現は、私たちの身体そのものと身体の動きを媒体とすることから、極めて原初的な非言語的行為である。また、表現は、私たちの感性が捉えた直観的なイメージを拠り所につくられ、人は表現することで、自己と対象とのあいだに意味を創出させながら、物語をつくりだしていく。博物館に身体表現の場を設けるのは、こうした表現での意味創出によって、ワークショップという学びの場に集う一人ひとりが、表現の対象である文化資源とその先にある異なる文化をどう捉え、どのようなかかわりを築こうとするのかを、連続的に変容・発展させる契機となることを期待するからである。

さらに本研究では、身体で表現する場に多様な他者が存在することで、それぞれから質の異なる気づきが生まれ、それらが身体を介したつながりによって相互に深化することを期待して、年齢や性別、障害の有無、知識の差異等、さまざまな背景をもつ人々が、博物館の資源に共にかかわりながら、表現し交流し合うインクルーシブな場をつくりだすことを目指し、そのための方法論の検討を試みている。

身体での異文化との出会いの技術的支援（シャドウ・パペット・システム：早稲田大学・三輪研究室開発）。

本プロジェクトの特色

① 共に創る研究会

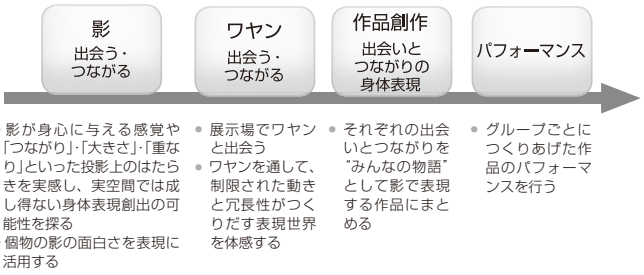
本研究の大きな特色は、上記のような、博物館における身体での表現創出を活用した新しい異文化理解のプログラムを検討するために、文化人類学、身体表現、工学、教育学の専門家が協働し、専門を超えるオリジナルな「何か」を共に創りだすことを目指す点にある。特に、身体でのコミュニケーションや共創の技術的支援の研究を行っている工学研究者の参加は、ファシリテーターによる人的支援を中心に展開されてきたこれまでの博物館ワークショップに、文化資源との出会いの場や、異なる背景をもつ人々の身体での共創表現を引き出し、活性化するための技術的支援を積極的に開発・導入し、両者が有機的に連動する学びの可能性を探るという意味で、刺激的なものとなっている。2008、2009年度に開催した計8回の共同研究会では、「身体・つながり・表現」をキーワードに、各領域の研究者が相互に話題を提供し合い、その後に討議を行うことで、各領域での共創表現に関連する研究について、個々のメンバーが新しい知見を得ることができた。同時に、領域の独自性や差異とそれらを超えた問題の所在が整理されつつある。

② 表現ワークショップの企画・運営

本プロジェクトの2つ目の特色は、みんぱくでの新しい学びのデザイン化に向けた理論の検討と実践の現場とを繋ぐために、研究会が主体となって、実験的な表現ワークショップ「表現で出会う・表現でつながる」を企画・運営する点にある。つまり、①で創りだした「何か」が、みんぱくで現れでるための場づくりである。共同研究では、このワークショップの目標の設定、具体的な技術開発（上掲写真）および人的支援の方法や整備に関する情報の共有、いくつかの実験と討議を行ってきた。ワークショップの企画に際しては、研究会メンバー自らが身体による模擬体験を重ね、あわせて、教育機関や地域社会等と連携しながら、年間を通じての小規模な事前活動と省察とを繰り返し、感性的な気づきとその深化を促す表現創出の支援方法を具体的かつ段階的に検討してきた。また、ワークショップおよび開発プログラムの質的・量的評価に関しては、調査方法の検討や質問紙作成等を進めるとともに、ワークショップの記録方法に関して、各専門領域の意見を集約しながら方法を考案し、実際のワークショップ時での活用を試みている。

公開ワークショップ 表現で出会う・表現でつながる「影で出会う・影でつながる」の開催

本プロジェクトで検討・開発したプログラムの実験的な実践の場として、2010年の3月21、22日の2日間にわたって、みんぱくの特別展示場を会場に、ジャワの影絵芝居ワヤン・クリを題材にした「影で出会う・影でつながる」表現ワークショップを開催した。当日は、関西および関東から3歳児から60歳代までの男女約50名（肢体不自由の障害児・者、視覚障害児・者を含む）が参加し、下図に示す流れで共創的な表現活動を展開した。また、2日目には、公開パフォーマンスを実施し、各グループが創りだした表現作品の発表を通じて、200名あまりの人々が交流の機会をもつことができた。



表現ワークショップの2日間の流れ。写真はその様子。

はたして、本研究が目指した私たちの「何か」は、ワークショップの場に現れでたのであろうか。大きなスクリーンに身体の影を映しての影遊びは、展示場でのワヤンとの出会いに新たな回路を開き得たのか、ワヤンの深遠な文化的世界と参加者それぞれの物語る自由との関係は如何にあるべきであったのだろうか、多様な人々が集うインクルーシブな環境は、戸惑いや不安をも含めて、モノとの出会いにどんな気づきを促したのか、本ワークショップに向けて研究・開発されたシステムは、ワヤンとの直観的な出会いの痕跡を身体に残し得たのであろうか…。本研究のメンバーは、自らが実践現場に身を置き、ワークショップに参加する人々と共に表現することで、新しい学びのデザインの可能性と沢山の未解決の課題に埋もれた私たちなりの「何か」の存在を、おぼろげながら感じることができた。まだ、はっきりとはつかめないけれど…。

にし ひろこ

東洋英和女学院大学人間科学部教授。専門は舞踊学、身体表現論。研究と実践を繋ぐ試みとして、1997年より「みんなのダンスフィールド（Inclusive Field for Dance）」を主宰。年齢や性別、障害の有無等を超えた身体での共創表現を模索。